## 文明の衝突と新たな世界的混迷の政治的原因

**ダン, ジョン** ケンブリッジ大学: 教授

関口, 正司 訳 九州大学大学院法学研究院: 教授

https://doi.org/10.15017/16445

出版情報:政治研究. 54, pp. 1-21, 2007-03-31. 九州大学法学部政治研究室

バージョン: 権利関係:

## 文明の衝突と新たな世界的混迷の政治的原因

ジョン・ダン

**— 1 —** 

そう活発にそうするよう人々を煽り立てることであったというのは、到底ありえないことである。これを推奨すること 来的に、 るほどには賢明でない形で、自分が同一視しているものに対して反応し、また、自分が同一視しているものを介して反 重は間違いなく後者に傾くという、カール・シュミットの有名な衝撃的主張とかなり共通している。第二に、 為の原因に関するきわめて重要で相当に論争的な見解であり、政治生活における決定的要因は友・敵の選択であって比 突する傾向にある(少なくとも現在は、 執拗でぐらつくことのない現時点での自己利益のためというよりも、むしろ自分が一体感を持っているもののために衝 ンティントンの主たる主張から端的にたどりつく考えだ、ということである。その主張とは、大規模な集団内の人間 ずの帰結を、実のところは擁護しているとして非難されてきた。 私がこのように考えるのには幾つかの明瞭な理由があり、それらを合わせればかなり強力である。 仮に自分たちの利益が本当は何であるかについての理解を通じてのみ反応するのであれば何とか賢明でいられ ということである。これら二つの理由だけからしても、ハンティントンの真意が、より大規模か また、つねにそうだと考える人もいる)、という主張である。これは、 人間は本

呼ば は、 ろの絶対的優位や自分自身の判断力の明敏さについてわれわれがどれほど楽観的であるとしても、 じるかもしれないし(実際、 制度が頼りになるという点で大いに楽観的な人々であるならば、 う西欧とは文明的に異なっている世界の広大な他地域にエネルギー供給の多くを依存し、また予見しうる将来に 即座に展開| いうのは、 否定することよりも、 に 家でもある。 も依存し続けるであろう、 いじゅうたちにおおさわぎをはじめさせよう」と言うことであったであろう。これがハンティントンの意図であったと 彼が示唆してい 実主義的な政治思想家であれ ントンは、 いること、 敗北であった、 アメリ れてい いてである。 (あるいは、 るも Ź 彼が実際に問題となっている何かを見ていることを否定するのは、 次の点を踏まえるならば、  $\exists$ 可 彼自身にも、 1 能な軍事力 の童話作家で『かいじゅうたちのいるところ』の作者であるモーリス・センダックの口調を借り і П のの相対的な力が、東アジアの主要社会に比べて、また、今や南アジアの主要社会とすら比べてみても、 る救治策に改良を加えようとする前に、 ッパでの言い方では保守的な政治思想家であり、 九六四ー か 少なくとも自分たちの方策よりも有望ではない)と感ずるであろう。 彼 が ?自ら 近年 政治: ということだったのである。 (衝撃と恐怖を与える集中的能力) それはいささか粗雑である)、 ば誰に対してもそうでであったように、 六五年のアメリカによるベトナム問題への関与〔トンキン湾事件から北爆開始時〕 掴 Ò 的助言者としての数多くの失敗はあった。 れでい 彼の関与は、 なおさらありえない。 るもの ベトナムのときとはほとんど正反対である。 の反応に改良を加えようとすることの方が 自らの頭脳明晰さに大いに自信があり、 個 それらの潜在的な衝突の苦痛や危険に対する彼の緩和策は、 々の具体的な点でその診断に磨きをかけることが必要なのは すなわち、 を除いては、 諸文明についての彼の見方はいささか粗雑であると感 よくよく読めば、 何事かを教えたと言えよう。 彼の要点の第二は、 とり きわめて急速に凋落しており、 わけ、 愚かでもあり粗野でもあろう。 アメリカ戦後史に きわめて興味深く示唆に富 教訓 しかし、 依然として習慣的 ベ トナ また、 的 彼が何事かを掴んで Ĺ な 彼の診断を全面 Ō) は 自らのめざすとこ 彼に対 自分たち である(ただし、 おける 彼の語 ń に西 最大規模 ハンティ ば お 7 の時 む Ó 法で言 )政治 節に 7 か 期

**)**かだが

たな世界

的混

迷がもたらされ、

地球規模の政治的な感情・認知・

反応が悩ましく流動的な調子を高めていることは、

まり役立っていないとするならば、何らかのよりよい方向について正気で期待できるのは、 れば(これまで存在した中で最も控えめな判断ではあるが)、また、 国家が相互作用的に、 またそれ自体としてすら、あ ハンティントンの言い方に

経済が現在において、生態系上の安全を高めるのと少なくとも同程度に生態系上の危険をもたらしているとす

ている。

コンゴ共和国のことを考えてみればよい。)

ウェ は、 細に示したように、 なえた人物ではない。 定めようとしている人物と見るべきである。 ンをちらつかせる好戦的な乱暴者と見るべきではなく、地球上の集団的人間生活の長く緩慢な歴史について政治 らの力を増大させたり枯渇させたりしてきた。(ハンティントンは、 ては徹底して現実主義的な枠組の側から見ても、 現実主義者の分析では全く欠落しており、 ーバーと並置してみるならば、 シュミット 文明内の経済や国家以外のものだけということになる。 が捉えようとしていたことよりもウェーバ 至る所で国家と経済の双方に対し、それぞれの形成を助け、それらの目的を導く点で競合し、 (ウェーバー以後、 いっそうはっきり見えてくる。 誰かそのような人物がいただろうか。)しかし、彼が理解しようとしてる事 ハンティントンの枠組がしっかりと留まっているのと同程度に他 彼は、 政治的にきわめて啓発的である。 ウェーバーのような特質、 ーが捉えようとしていたことに近似してい これが彼の分析の強力な側面である。 彼は、 たんにカール・シュミットと並置するだけではなく 知的にもったいぶり高尚 知性、 文明は、 意図の堅固さ、 マックス・ウェ な政治的コネク 想像 る。 それ 力の そ Ì の点 閃 にお 1 それ が詳 他 柄

的姿勢という点での苛酷さは軽微である。なぜか。その主たる理由は、 スティックな自己欺瞞に陥っており、外に表われている自分の性質について全く無自覚だからであり、 り(そのことを誇張するのは容易ではあるにせよ)、 騎士道精神にあふれているとしても、 驚くにあたらないことだが、現存する文明はいずれも、 人類の長期的存続に断固反対してはいない。また、 その方向はおそらく、 部の人間 が個人の生命を犠牲にすることに関してどれほ 経済と国家のいずれもが、 現在の経済や国家に比べれば、 文明が確定した方向を持 今やきわめてナル 他 イデ Ō 人間 オロ たちに う 限

の本来的な闘争性やそれから生ずる政治的含意をはるかに超えるものなのである。)

然界に自 n 類 がが 分たち う状態を、 現在陥 であ の目的 れその 5 てい 多か で首尾よく押しつけることによって、 ような救; る生態系上の窮状という深刻な問題には、 れ少なかれ手付かずの 治策が仮にあれ ば、 まま確実に維持できるのでは、 それ は 窮状を効果的 ゆったりくつろげるような居住環境を自然界が提供 根底的な救治策があるかもし に解消するであろう。 と勝手に思い込む無思慮な歴史的 また、 ň ない そうで な あ n してく

ば

ば

意図せずして害悪を与えているからである。

策を、 それが、ハンティントンの取り組もうとしている問題なのであり、 際限なく揃っていることは、 た疑問符の意味だったのである。 るにしても、それは明らかに、 また、十分な救済策があるのかどうか定かでない相当に深刻な問題であり、現時点で目に見えて急速に深刻化している。 についての問題でもある。政治的および経済的に現在のような形になっている世界における文明間の相互作用の問題も ありえそうではある。 とすれば、 まだ一貫した考えを持っていないということである。 相互に着実に支え合うことを可能とする仕方で効果的に結合するにはどうしたらよいのかについて、 いずれかの文明、あるいは何らかの仕組でまとまった一連の諸文明がそれを手にするということは、 われわれが依然として絶えず窮状をさらに悪化させている多くの点について、 しかし、 十分すぎるほどはっきりしている。 切迫した問題は、これだけではない。それはまた、諸文明がまとまることのできる条件 かなり緊要な問題である。そのことが、彼の当初の論文でタイトルの最後に登場してい われわれの集団的な生態系上の窮状に対して救済策が本当にある しかし、それにもまして明らかなのは、 彼がそれを扱う際の語り口についてどのように考え 軽減策がほとんど そうし われ われは

できるであろう。 しい水準の精神的な自己規律や自己抑制を発展させることによって、衝突そのものを減少させることを習得する 的知性によって減少させることを無理なく期待できるであろう。 を持つ続けることになろう。しかし、衝突それ自体は、つねにある程度は理由のないものであろうし、より大きな政治 刻な利害対立によってさらに悪化している)として捉えることができる。この見方からすれば、文明は衝突に陥る傾向 に、個別的文脈における政治的無思慮の問題(ただし、政治的相互作用がつねにそうであるように、散在する悪意や深 ことができるのであり、 て考える以外に選択の余地はない。ただし、政治的相互作用の問題としてすら、それは少なくとも二通りの仕方で見る ない。ただ、それが記述しているとしている事柄をわれわれが遺憾に思う限りでは、 `文明の衝突」は、 (問題をこのように見るのであれば、諸文明は、今なお、大いなる政治的知性を必要としていることに 近年生じている物事についての記述の仕方として適当であるかもしれないし、適当でない 二つの全く異なった様式の枠内でその重要度の測定を試みることができる。 あるいは、 おそらくは文明自体が、 それを政治的相互作用 第一に、それを主 の問 かもしれ 題とし

規模な聴衆に向けて、 の政治的知性が必要であろう。) すなわち、 引き延ばされ 全世界のすべての人々に向けて、 ている猶予期間 ―この仮説上の習得能力を働かせ、 教訓を伝えることのできる猶予期間 十分に受容力のあ を乗り切ってい るきわ くため がめて大

なるのは、インドとパキスタンの関係であろう。 ということである。 ということであり、 であり、また、東アジアはともあれヨーロッパでは冷戦の安定化という点で核兵器の貢献はきわめて危ういものだった もって茫然とせざるをえないような対立構造を、 ますます病理的な方向に進んできている。旧来の悪しき対立構造、だが、相対的には明確で十分適切に理解されていた とに関してどのように説明するのかである。ソ連崩壊後の一五年間で、とくに目立つ政治的相互作用の多くは、 (圧倒的に危険ではあれ) もちろん、これに代えて、われれの問題を構造的な宿命の問題として見ることもできるであろう。 危険きわまりないものとなるおそれがある。この点で注目すべきなのは、核兵器のつねに不安を駆り立てる役割 依然として問題なのは、 核兵器が今日の対立構造を悪化させるよりもむしろ安定させる、 たとえば北朝鮮や、あるいはイランを見ればよい。この判断に関して弱いながらも反証例の候 対立構造に代わって、 政治的相互作用の同一の過程がますます意気阻喪を招くような帰結をもたらしているこ それは文明の衝突と言えるかもしれないし言えない われわれは増長させてきた。それは拡散性と強度とが結合しているた はるかに醜悪で愚劣な類いの複合的な対立構造、 などという見通しは全く立たな はるかに曖昧で全く いずれ かもしれ の場合にし な 総じて 対立

うした行為者のなす選択は、 めてよい認識がありさえすれば、 さか不純で混乱している政治的行為者による、行為主体レベルでの政治的無思慮の帰結として分析することであ うし、どこを出発点に選ぼうとも(たとえば一九九一年)、すでに予定されていた帰結として見ることができるであろう。 それをもっと主意主義的に分析しよう試みることもできるであろう。つまり、予見と洞察が限定され動機はいさ 仮に自らが行ないつつあることについて、彼らがもっと賢明で節度があり、 ほぼ間違いなく別の仕方でしたであろうような選択である。 私の個人的な見方では、

問題が主に政治的相互作用の問題であるならば、それを構造的かつ宿命論的に分析しようと試みることは可能であろ

であるが、

しかし、

明らかにそれ以外の多くのものでもある。

そのような行為の中にはたらく無思慮を、正面観覧席から見たばかりなのである。

りする。 的におけるどのような急速な変化なり持続的な変化なりが、その方向へと逸れることなく収束したのかを見分けること かは判然としないし、 言えないであろう。 と考えるのが妥当な場合もしばしばあるにせよ、である)。スペイン文明とアステカ文明との長期のわたる平和共存につ ということを意味する(もちろん、少なくとも特定の場所と時間において答が否定的となることもあるのではない 除することによってのみ、最終的に解決できる。そのことは、最終的な解決が否定的なもので終わることはありえない の精神が競う市場) は、紛れもなくそのような願望として文明自体によっても受け止められていた。構造的宿命の問題は、想像上の競合(諸々 とも恥知らずで不当にもライバルだとうそぶいているように見える相手とも、全く同様に激しく衝突した理由が に見ているものと衝突するばかりでなく、 希望や願望の放棄ではなく自らの存在理由総体の放棄によってのみである。そのように見るならば、 願望と見ることができるであろう。 見ることができ、比喩的な意味での作用主体と見ることすらできるであろう。 事前にどのような可能性を予想できたであろうか。そのような可能性は長い間、 そのことだけでは構造的な宿命を立証するには不十分である。独占の願望は歴史の中に散在しており、 独占の願望は、 (宿命論的 しかし、そうした可能性は、たとえ勤勉に探求されたとしても、なぜ有望だと判明するに至ったの における独占の願望の影響を局限するような枠組を見出し、その競合から身体的な脅迫や虐待を排 な)様式では、 なぜ有望たりえたのかすらも、 危険の明らかに十分な源泉であり、そのことは歴史的帰納によって十分に確証されている。 これを放棄できるのは、 文明は、その存在を構成する原理によって衝突を強いられている実体や単位 たがいに独占をめざすライバルでありながら、それぞれの目からは多少なり あまりよく分からない。主人公たちの側の政治的目的や精神的目 一種の自殺によってのみであり、 その核心は、 実際に探求されてい 独占の願望、 すなわち、 野蛮として軽蔑的 たんに自らの 帰依の一元化 たのだとは その多く はっき

は難し

が依拠していた諸前提に訴えることよってなされたのであった。 きわめて広汎に実行されたということである。 た宗教的寛容の理論 b n わ n が知っているのは次のことである。 という、 少なくとも一つの事例において、独占の願望が解き放った蛮行を馴致する枠組が見出され、 しかもそれは、 すなわち、 数世紀に及ぶ非常に恐ろしい経験の後に一七世紀に構築され 独占しようという意思を超越して、 独占の主張それ自体

論は、 化を図ろうとしていた文明にとって真の原理と思えるような何かを与えられてはいなかったのである。 そして幾つかの点ではこの定式ですら、 きた表現の内で最も辛辣な表現〔怪獣の名称である「リヴァイアサン」〕を国家に与えることになる。 であったこの政治的宗教的定式は、「領土ノ属スル人ニ宗教モ属ス (cujus regio, ejus religio)」という成果を達成する 制するものとしての国家、 問題に対して、 ア条約という鎮静化の応急措置を、 でない基盤探求がもたらした歴史的所産であった。 た目標に据えることの拒否である。 いる諸宗派の平和共存という問題に対して、どこまで有効な解決であったのかを考えてみることも価値がある。 えてみることは たんなる政治的無思慮によってよりも、 今日の人間世界に ても、 の手段という役割を領土国家に割り当てた。そしてそのすぐ後に、トマス・ホッブズは、 本質的に二つの部分から構成されていた。 また、 すなわち、 価値 モンテーニュの考えにおいてすら、そうであった。 お がある。 いて、 および、 キリスト教の諸要件に関する有効性をめぐり、 また、 現在の文明 平和共存の諸条件の強制者としての国家は、 宗教的な信条や営みを強制すべき正統とすることを規範的あるいは原理的に一貫し より長期的に、 ヨーロッパの戦争の神の知的結論が、 混沌状態を封じ込めるための実務上の処方箋であった。 むしろ構造的宿命によって生じているという可能性を、 (いずれも、 すなわち、共存の場でありかつ共存の平和的性格を高度に実効的 ホッブズの考えにおいてそうであったのと同様に、  $\exists$ しばらく前 1  $\Box$ ッパ文明の新憲章へと転換したのは、 のきわめて異なった世界に由来してい ウェ それを体現しているのは自分だと言い われ ストファリア条約において一時的妥協 われ自身の問題と多くの類似点を持 かなりの程度、 国家に対して与えられて それぞれは 共同生活のより 少なくとも手短か 七世 しかしこの条約は、 ウェ 紀後 ボダンの考えに る スト 半の宗教 まだ、 ・ファ の要件 破壊 そ 争って Ò っ ĸ た

寛容において、

とりわけスピノザ、

ロック、

ピ エ

ール・ベ

ール

の思想において明瞭に表現された想像的

抑制

であった

る)。そして、それがロールズにとって悪夢であったとするならば、彼の当初のヴィジョンを国際レベルにまで押 時期を通じてハーバードヤードで教鞭をとっていたから、悪夢は、この敷地のちょうど反対側で呼び出されたことにな ことは偶然ではない。文明の衝突は、ロールズにとって悪夢であった(ハンティントンもまた、成人後の生涯のほぼ全 てばかりでなく、国際関係についての自由主義的理論においても、あれほどまでに中軸的な役割を果たすまでになった ジョン・ロールズの著作において顕著にそうであるように、国内的な政治生活に関する自由主義的哲学との関連におい ようとしてきた要求度の高い自由主義的政治哲学者たちにとっては、それをどれほど上回る悪夢であろうか。 その成果が(もちろん、それが国家レベルで奉ぜられるようになったのは、もう少し後のことである)、三世紀を経て、

の争いを煽り立てた点では、 メッセージ〔ルカ伝、14・16-21〕の意味に関するきわめて広汎に信じられた解釈であった。イスラム世界に直面した 真理が何であるかを知った幸運な者たちの第一の責務であるという見解は、ナザレのイエスの生涯が残した謎 ある。西欧文明の核心をなすキリスト教を振り返って見るならば、その勢力範囲内の万人に真理を強制することはその は、それを駆り立てているのがたんなる政治的無思慮ではなく、将来的帰結への憂慮といった根拠から否認したり無視 をよく見ていただきたい。)衝突はそれ自体として、意気阻喪させる形態をとることもあろう。しかし、真に恐ろしいの 環境からして、そうなることは明らかに必至であるが)、衝突は遅かれ早かれ路上での個人的あるいは集団的な攻撃を超 したりするには文明のアイデンティティや自己イメージにとってあまりに中心的な原因なのではないか、ということで えて、きわめて大規模な政治的無思慮の様相を実際に帯びてくることは、ほぼ確実である。(あらためて、テレビの画面 しという、召使いに課せられた責務は、 文明の衝突が構造的な宿命であるとするならば、いったん各文明が近接して共存せざるをえなくなると(今日 ッパのイメージ形成におけるその役割は、多く論者とりわけトマス・マストナクによって、 それが果たした役割は、 いっそう際立っていた。(ロ) 当該社会においても、対する他文明においてと全く同じくあまねく自信満々 謎かけのメッセージが意味し要求している事柄について競い合う解釈者たち 生け垣のおもての道に出て乗り気でない客に家に入るよう強い 詳しく研究され てい

この はい 直面 功の見通しを持ちながら強制するための集中的な威嚇力を統制していた 持つという実存的 に 何 < 解に刻苦精励してきたが、ごく限られた成功しか収めていないと言わねばならない。 なくとも部分的には脱却したことを示しているからである。 故に脱却しようと努めたかについ 根付いてしまっている害悪からの回復を期待する歴史的根拠を提示してはいる。 1 罠からどのようにして、 っそう厳格な している危険の大きさを無信仰者や異なった信仰の信者たちに知らしめることであった。 ・ロッパ 仰強制 0) か ~につい の絶 史のきわめて重要な特徴である。 幸運に恵ま 対 (また、 ては、 的責務だと読解され 実際に、 は また何故に、 れたすべての者の責務であった。 るかに緊要な) は分からないままである。 て知らない てい 逃れることになったのかについて、 いたのである。 (11) のと同様に---責務であった。 なぜなら、 Ų いず しか わ ずれの場合も、波及性のある本当に -まだ十分に理解し n 'n しかし、 ĩ わ の場合におい れは、 歴史家たちは過去二〇年にわたってそれぞ 教会の権威を掌握してい (同一のあるいは別)  $\Xi$ 1 ても、 て ――奴隷制からどのようにして、 口 ッ 41 ない。 パ しかし今のところ、 0) それぞれの 強制する側の キリスト これら その役目は、 の人々にとっ 教界 歴史家は、 凄 は た人々や、 まじ 役目は、 ず が、 それ 'n VΔ 何 ŧ らの 大規 事 ては、 自分 何 ら仕 か 5 0 玾 から また何 たちが 口 n 解 それ 仰を 復 す 0) け た

るに 者すべてに帰すことを選ぶ 化とか深まっていく啓蒙に導かれたものと考えるか、 しとなるものがある。 ということである。 うに見えてい う事実からは、 構造的宿命 が幾分容易に見て取ることができるのは、 たもの 新たな視角が、 が、 そのような再考を、 何ら という診断の説得力を消散させる想像的基盤を提供するには十分である。 それはおそらく、 長い歳月を経て結局 か か、 の変形版でそれが再度生起しうると推論することは理に適っている。 まさにそのようなスケールでの再考にともなう想像上の明らかな痛みを大い そのい ずれにせよ、 今日の衝突の直接性や激しさに関する短期的な憂慮を軽減するには不十分であ 思慮に発す のところは このア ,る危惧 あるい 長い間、 原 クロ 理解 0 は、 高 バ 釈上 まりに駆り立てら  $\exists$ これら三者の間 ット 1 一の誤り  $\Box$ ッパ 的な態度の逆転には、 文明の核心をなす絶対不可 (解 釈学的 0) n 力配分を測ろうとすることなし たものと考えるか、 誤謬) 少なくともある程 だと考え直 何 事 もちろん、 欠の か され 精神構造 が以前に生起 根 に緩 たと 本 それがそ 度 は 和 うこ 励 した 0) ょ ま

う。 ることが必要不可欠であることに変わりはない。そうすることは、 のような程度のもっともらしさを、 起を妨げないであろう、 のまま生起するとか、 人間世界の組織のあり方において事実として明々白々に変化しているものが、 ということではないが。)ただし、説得力の弱い診断でも依然として正しい場合はあろうし、そ いささかでも信頼できる形で評価できる概念形態へと転換する方途を見出そうとす 現代政治の理解にとってきわめて重要な貢献であろ そのままの形の生

オロ の環境の歓迎できない諸特徴に関する責任を即座に外的要因に転嫁し、自分たち自身の悪しき理由に依拠して動い に機能することとなり、相互的無思慮のうちの自らの持ち分を銘記しそれに対応していくというよりも、 は、(ハンティントンが示しているシュミット的な見方をすれば)消極的な自己同定の教義およびメカニズムとして円滑 とその起源に関する理論が際立って過剰であって、 らくある程度は、 以上に文明間の関係においても、 結論が歓迎できないものであるという事実は、それを誤りだと信ずることの正当な理由となるわけではない。 . は説明しようとしている事柄の境界線上に、堕落が位置しているというところにある。このようにして、 ギー上の対抗者と比べて、イデオロギー的な弱点であるというわけではない。対抗者の側では、 堕落ということに関する豊かな、 理論的に先取りするような形で過大評価するようにすらなっている。 政治的無思慮の因果的比重を過大評価する想像力上の傾向を持つばかりでなく、 あるいは説得力のある理論を欠いているために、 説得力はさらに貧弱なのである。 要点は、 これは、 国際関係ば 自由主義自体 現在流布しているイデ 多くの場合、 かりでなく、 むしろ、 が理解しあ 自由主義 自ら てい 堕落 それ

現すべく設計された政治体制としては世界最古の体制の下にある市民の一団によって歴史のこの段階でなされた選択 ことは理にか うことが難しく選挙の結果も明白であった少なくとも二期目について言えば、 リックを、 当然のことながら私は、 まさしく自由主義から発したものと見るべきだと主張したいわけではない。 なっ てい る ブッシュ大統領による侵攻の決定や、 その選択は、 憲法において広い意味での自由主義的な権力概念を採用し、 彼が嫌う政治体制との関連における彼の特徴的 それを民主的に支持された選択とみなす しかし、 それらの それを構造的に体 輪郭を見間

カの 地球規模の政治的無思慮をまさに正当化するために採用された修辞的な言葉だとすら考えてもよいであろう。) tionの機会は 分別によって実際上確保されてい 然な想定が妥当 ころでは、 に宿命的とい るよりも、 予見可能な将来にわたってこの形態にはまりこんだままであるはずだという判断や、 思慮をありふれた形で煽り立て、 ちであった考え) だったのである。 であれ別の政権であれ、 であろうとい くしてしまおうと意図してい であるとしても、 新たな世界的 |政治体制の二世紀という古い歴史が、いったいどのようにして、現時点でこの特殊な形態に行き着いたのかを捉え 分別 国の父たちは、 国際的 重要な歴史の仕事である。 その可 わ う判 n う判断すらも立証するかといえば、 |性を欠い わ 端的に、 な通商 アメリ は、 n 彼が再選されたことについては、 能性は厳しくなさそうでもある。 混迷の原因を探る際に考える必要のある事柄のうち、 断を立証 大統領 が嫌ったり否認している人々の行為に投射してしまった方が気楽である。 そうした堕落の空間的分布に関する驚くほど機械的な比喩 カの 相当の注意を払って政治的裁量を制限することに熱心であった。 とい てい 自らの政治的裁量をより分別ある仕方で用いることのできる可能性に他ならない。 政治的裁量 political discretion の存在から帰結する。 の職務をあ 政 するために必要とされるような理論は強すぎるのであり、 治体 う頼りになる穏健化効果によって、 ないかどうかである。 たわけではないこともたしかである。 過熱していきながら実際の行為につながっていった。(あのような言葉は、全くもっ 制やそれに相当する現代の政治体制であ のように始めたことについてブッシュ しかし、どのようにしてそうなったかについての説得力ある歴史的説明で とい . つ た理論は 私は大いに疑問に思う。 この見方を裏返した像が直ちに却下できるのは、 考える必要があるのは、さらに詳細に考察してみて、 アメリカ国民を非難する他はない。 は直ちに却下可能である。これら二つの考え方は、アル あるい 堕落に関するブッシュ政権 一つの大きな部分は、 は、 れば、 構造的宿命は、 大統領を非難することはできるし非 民主的な利益代表の機械的に自 それ 柔和な交際 doux commerce (そ (悪の枢軸) は自 あるいは、 有効性を示す見込み 政治的無思慮 political indiscre-しかし彼らが、 由な行為の随 わ n アメリカ政 し とあい の理論 われ自身 はまりこんだままな か たしかであ まって、 伴物である。 (それ それぞれ 0 政治的 そのような自 行為 府 は かが、 ほ が 政治的 に適 主張 見したと 裁量をな ア い場合 現 n アメ す 1)

る、

1

思慮が要求している事柄を見分ける認知力を損ねており、 は うことを聞かない体制に民主主義を武力で押しつけることが、目的に対して効果がないと予想可能な手段だということ イラクの事例は大いに当を得たものと思われるのであり、それだけに、比較的近い未来にそれがイランにまで広がって あるいは実際に国家と競合する他の多くの作用主体と比べて国家を弱体化させている場合も多いのである。あらためて、 そうすることによって、 の衝突の中心的イメージは、広く拡散し焦点のずれた刺々しさの世界を示している。この刺々しさが攻撃を動機づけ、 大半の国家が本当の民主的国家でないことが歴然としている世界においては、当面の行動指針を与えてくれない。文明 べての国家が民主主義になればたがいに戦うことはない、という仮定条件が真理として了解可能だとしても、 えるような訓示は、近年では、文明の衝突の激しさを緩和するよりも、文明の衝突を助長することに役立っている。言 論であった。このような配置図を補なう最新のイデオロギー的モチーフ、すなわち、民主的平和というカント的 歯止めなき重商主義的ビジョンであり、一八世紀末のブリテン旧体制の代表的地位に関する広い意味でのバ ものを示しては 功利主義 シュマンの 効果なしと事前に広く予言されていた手段であったということと同様に、すでに証明済みである。たとえ仮に、す 的原理が有益な形で要約しているが、それらのすぐ前の時期の主要な議論に比べれば、 The Passions and the Interests 〔邦訳書タイトルは いる。 先行する議論は、 思慮にもとづく対応の中心的な仕組としての国家を弱体化させ混乱させており、 国民全般の国内的繁栄をグローバルな地政学的展開の追求に従属させるとい しかもますます規模を拡大しつつ、そうしているのである。 『情念の政治経済学』〕や、代議政治に関する古典的な<sup>(33</sup>) 進歩と思えなくもな また、 ] ク的擁護 とも思

れも、 組織立てられようとしている諸カテゴリー 性についても疑うことができるであろう。 このような考え方の分析上の正確さについて、疑うことはできるであろう(難しい仕事ではない)。 ことさらに教訓的だとは思えない。 行為主体を啓発し合理的に扱うという見通しを疑うこともである。 すなわち、行為主体を不快にし、あからさまに迷信的で狂信的にするよりも、 が、自ら標的としている主題を、 分析上の正確さが実践的理解において役立つのは、 しかし私には、これら二つの考え方はいず 適切に関連し正確でもある仕方で捕捉して そのような分析に その実践上の妥当

いく可能性は無気味に思えてくる。

はあ 策ある るい れが提示しているのかどうかである。 そのように見るならば、 際通商、 この危険なプロセスに関しては、 うに見るならば、 しょ 方策を、 の貴重な補遺とみなす理 ム自体は端的に言って、 者が文明と文明との遭遇によって実際面でかなり激しくかき乱されている、 い)。判断力を堕落させ思慮を危うくするは、 ンの考えにおける ティントンの掴 はきわめて異なった流儀で政治的判断を堕落させる有力なメカニズムについて与えている描写である。 る場合だけである。 これ ・はメ るが用いられい 地 W 位 は に カニズムに対して、 国家機関 は様 は 1 それらはいず メカニズムは、 口 Z 相応に深遠な後援者がおり(ハーバーマス、 ッ んでい 、だが パ 判断力の堕落は、 文明の内側での精神的探求) 政治理論 る。 玉 幾人かの際立った歴史的見本もある 「社会主義のような)は、 るものであり、それが今日の世界においてきわめて顕著に作用しているものなのである。)このよ ハンティントンのイメージ的表現の中で直観的に最も示唆的な要素は、 す 'n 由がある。 ハンティントンの診断 自信回復の現実的な根拠を提供するにはあまりにも漠然としており、 なわち、 たしかに文明の中で生じているものであり、過去一○年ないし二○年にわたって散発的に 論 ŧ ハンティント が過去の三世紀ないし四世紀に 当該の文明の内側におい 集団的判断を鍛錬し冷静沈着なものとするためにこれまで思い描かれてきた方策 それに比べて明確でない その発生源である文明に固有の属性ではない。 これに対するなるほどと思える答えは、 つの文明の内側での精神的探求ではなく、 シの ハンティントンの主張によれば、文明の間の相互作用なのである。 には、 洞 完全に一貫した因果的可能性である(これはたんなる言葉の遊戯ではな 察は、 はいずれも、 少なくとも支持を与えてはい 九世紀および二〇世紀のヨー てすら、 (ムガル アマーティア・セン、 のは、 わたってどうにか考えてきた方策を超 大いに強力であるようには見えない。 明らかに同様の歪みを被っている。 のアクバル大帝、 診断されたような危険状態を改善あるい と容易に見ることができるということだけ そうするための一つのかなり古い 文明と文明との間での それにおそらくは、 一つの文明における思慮 る、 中国 ・ロッパ [の宮廷に派遣された ということであろう。 政治理論 古典的 あまりにも脆弱であ えるも 論 それらのメカニズ な利 に たんに、これら三 精神的 対 ダライ ` (それ Ŏ) する診 益 は 一の考 (スター 探求であ しか ラマ)、 その方 方策 て、 が エズス 断 面 ŧ あ

会の使節たち、

それにおそらくは、

哲学者のスピノザやマイモニデス、

詩人のタゴ

ール、

また、

これ

ほどまでに高水準

私には大い ビル・ソサイエティといった社会学用語に移しかえることによって、想像的に訴える力や政治的説得力が高まるか る方策の中でまさに思慮にかなった最善の方策であろう。ただし、 に疑問に思えるのではあるが。 疑いなく他の数多くの人々)。それは緩慢で邪魔の入る道筋ではあるが、しかし、 それをNGOという制度上の流行やグロ われわ 1

れは 状態へとそうした壮大な側面を導く遭遇として思い描く限りでは、 性の壮大で歴史的に根深い側面での遭遇として思い描く限りでは、 の遭遇、 水準を明らかに上回るような答えを持っていない。 ように感じられても仕方ないであろう。 上に、自らの目標を啓発することにも役立ちそうにない。これは明らかに、思慮を高めることに直接的には役立たな たしかにそれは、 をなす非キリスト教の多数者に直面して自らの力を強化するための存在論的根拠に比べて、節操はないが頭脳明 て取るのは、いっそう容易である。その視角からすれば、文明という引照基準は、世界の他の部分とりわけその大部分 てかなり多くの人々の見方であるから)、それを深く脅かすのは、マホメットの亡霊よりもダーウィンの亡霊であると見 キリスト教文明の一例である限り(なぜなら、それはその大半の住人たちの長い間にわたる見方であったし、依然とし か励ましを大いに与える、ということもありえないであろう。しかも、われわれは長期的にすら、現時点で願望充足 するわけではない。しかし、そうであるならば、この問題に対する説得力ある答えが、 このことによって、たしかに、世界の中で進行中の事柄に対して実践的にどのように対応するかの判断が大い また、自らの目標を結構な具合にすでに啓発的であったのだとみなす手持ちの根拠を誇張することに役立たない (節操がなく記念碑的に混乱した政治家はさておくとして) に対する手段的方策としていっそう有益に見えてくる。 少なくともかすかには境界線が引かれている国民経済間の遭遇は、 声 西欧 に響きすぎるほどに主張するならば、 (西欧という考え方にこだわるのであれば)が自らの目標を明確化する助けとはなりえない。そ 文明間の侮辱は政治的に重大である(ハンティントンがイスラムの復興と呼ん 国家と国家との遭遇、パワーブロック間の遭遇、エスニック集団間 侮辱に侮辱を上乗せするように、 とりわけ、明らかにまだ到達していない程度の危険 いっそう危険となることは間違い それを経験する人間たちがそれぞれ 短期的にかなり具体的に しかも十 把一 ない。 絡げにそうする アメリ 断な政 の同 に前 なると <sup>´</sup>カが

う。それがとりわけ破壊的となるのは、歴史的な自負や経験と現実の力とのギャップが痛々しいほど大きい場合である。 流れ込んでいるような仕方で中西部に入り込んだとしたら)、それはアメリカにもいっそう重くのしかかることになろ を停止させることができるし、政治的に対抗することも極度に困難となる。 や不偏の判定者などの穏やかな相当物が不在の場合に代役を務める一種の野性的な正義) していればいるほど、その社会は侮辱に敏感となり、侮辱を深刻に感ずるようになる。 でいるものに イスラム世界の大半がそうであるし、 自分自身の家庭においてより頻繁にかつ効果的に侮辱を受けたならば(もしアルジャジーラが、CNNが世界中に おお いて大い に目につく要素である)。それは世界の大方の政治感情に重くのしかかってい 中東も少なからずそうである。 他の条件が等しければ、 復讐の願望 は、 社会が弱体で貧困で混乱 思慮に即 (既知の確立した法 る。 した判断 仮にアメリカ

に移行していくことに甘んじているとしても)。また、 る(たとえ中国が、 文脈におい くの抗争を仕掛けることによって効力が回復することは、まずないであろう。それはまた、(⑸ メリカの不拡散政策には持続的成功の見込みはさしてなく、 ハンティントン自身が強調しているように、このことは、 形成し共有することを中国側が期待するかもしれない 他の多くの国々に対する対等な二者の覇権的支配として考えることに、 て大問題となっている。ここでは中国が世界帝国の潜在力をそなえた唯一の現存する実際上のライバ ダンテやカール五世、あるいはハドリアヌス帝以上に、支配領域が脱落していき実質的に周辺 日本は明らかに、中国を対等者として考えることにすら、 〔中国版の〕大東亜共栄圏を、 軍事的装置をさらに働かせながらより多くの地域でより多 とりわけ核軍備の分野では重要である。 依然として深刻な困難を経験 せいぜい 現在のところ、 のところ明らかに対 この分野では、 東アジアの ま ル で P

き手段である。 傾く人間 て核兵器を明ら 模の大小 の性 卣 は あ かに凌駕するにせよしないにせよ、 は れ互いに相手に対して深刻な危害を与えることのできる人間 つね んに、 政治的な仕組を構築し破壊する際の中心的要素の一つであった。 核兵器は、 現在のところ、その目的のための依然として最も恐るべ の能力と、 しば 生物兵器 L ば危害を加 が、 長期 える方 節に見 向

広大な規模の軍事力に対する支配を強固にすることによって自然状態を回避するなどということが、な

者と思えるような人物に出会っていない。そうした企ては、責任を一つの作用力だけに委ねることによって思慮にかなっ 馴致すること――は(人によっては、それをすべての文明の深遠な目標と考えるかもしれないが)、いまだかつて、成功 運であるかご存じないのです、ということである。)戦争や暴力を人間世界から除去する企て―― そうした仮定上の成果はどこにもない。このように言っても、他に何を意味するにせよ、因果的思考における大冒険を の成果にまでたどり着きさえすればそれらの危険は消滅してくれるという保証を、信頼できる形で与えてくれるような. た節約をしようとする絶望的な企てと見てもよい。しかし、その企てのあらゆる要素に危険が絡まっている。これこれ でいるものをきちんと調達するなどということが、なぜ期待可能なのかは、依然としてきわめて理解困難である。 いであろう。 待可能なのか、 しかし納得させることができないとすれば、すべての来訪者が言えるのは、あなたは御自分がどれほど幸 私が考えることのできる他のどの場所以上に、日本の読者にとっては、おそらく、 あるいは、 普遍的帝国が何らかの文明の支援を受けて、 国内的な警察活動で日常的に提供できない ―「かいじゅうたち」を あまり得心がい

果がこちらよりも当人にとっていっそう望ましくない可能性があると示せれば、さらに結構である。 蛮を糾弾することによって接近することは無益である。唯一の力強い希望は、 イラン、 て考えねばならない。 ることが相手と同様に自分にとってもまさに望ましくない結果をもたらすのだ、と示してやることである。 えるにせよ、当初から十分すぎるほどの可能性があったそうした帰結を、本人としても間違いなく後悔するであろう当 よりいっそう文脈的に、争点ごとに場所ごとに、無思慮な当事者の観点から厳密に無思慮の存在を明確化することによっ したことにはならない 〔本論文の修正版送付時〕におけるアメリカの現政権の世界戦略およびイスラエルの地域戦略にも、 したがって、ともかくも何らかの成功を収めるためには、明らかにわれわれは、無思慮を軽減させる見通しについて、 スチナの現政権に決定的に妥当する判断である。 われわれは考えねばならない。政治的共存の問題に対して、上品な非難を研ぎ澄ますことや様 可能性のある帰結がしかるべく現実のものになるならば、他の人々にもどれほど大きな苦痛を与 反対側から見るならば、 脅迫している当人に対して、脅迫を加え それはまた、 これは、 全く等しく妥当す 二〇〇六年秋段階 そうした結 北朝

## 原

- Samuel P. Huntington, 'A Clash of Civilisations?,' Foreign Affairs, 72, (1993), 22-49
- トン(鈴木主税訳)『文明の衝突』集英社〕. Samuel P. Huntington, The Clash of Civilizations (New York: Simon & Schuster), 1996 〔邦訳、サミュエル・P・ハンチン
- 次を参照。John Dunn, The Cunning of Unreason: making sense of politics (London: HarperCollins, 2000) シュミット (田中浩•原田武雄訳)『政治的なものの概念』未来社]. 判断が政治理解において鍵となる重要性を持つことについては Carl Schmitt, The Concept of the Political, tr. George Schwab (Chicago: University of Chicago Press) [邦訳'
- (4) John Dunn, 'The Emergence into Politics of Global Environmental Change,' Ted Munn (ed.), Encyclopedia of Global Environmental Change (London: John Wiley, 2002), vol. 5, 124-36.
- $\widehat{5}$ Diego Gambetta(ed.), Making Sense of Suicide Missions (Oxford: Clarendon Press, 2005).
- (6) Hernan Cortes, Letters from Mexico, ed. & trans. Anthony Pagden (New Haven, Yale University Press, 1986); Bernal Diaz 照。John Elliott. *Spain and its World* (New Haven: Yale University Press, 1989), chapters 2 & 3. より広くは同じ著者の次の Atlantic World 1500-1800 (Princeton: Princeton University Press, 1987), 51-93. スペインという背景については、とくに次を参 incorporation of Indian societies into the western world, 16th-18th centuries, tr. Eileen Corrigan (Cambridge: Polity, 1993) dynamics of colonization and globalization, tr. Deke Dusinberre (London: Routledge, 2002); The Conquest of Mexico: the California Press, 1993); Serge Gruzinski, Aztecs: rise and fall of an empire, tr. Paul G.Bahm (London: Thames & Hudson 2003) ; James Lockhart, We People Here: Nahuatl Accounts of the Conquest of Mexico (Berkeley, Calif.: University of see her Ambivalent Conquests: Maya and Spaniard in Yucatan 15173-70 (Cambridge: Cambridge University Press, 2nd ed Inga Clendinnen, Aztecs: An Interpretation (Cambridge: Cambridge University Press, 1991) and for the same issues in Yucatan ティーリョ(小林一宏訳)『メキシコ征服記』岩波書店〕: Hugh Thomas, The Conquest of Mexico, (London: Pimlico, 1994); The Conquest of New Spain, tr. J. M. Cohen (Harmondsworth: Penguin, 1963) 〔邦訳、ベルナール・ディーアス・デル・カス Anthony Pagden, 'Identity Formation in Spanish America,' Nicholas Canny & Anthony Pagden(eds.), Colonial Identity in the セルジュ・グリュジンスキ著 (齋藤晃訳・落合一泰監修)『アステカ王国』 創元社〕; The Mestizo Mind: the intellectual

- 文献を参照。Empires of the Atlantic World: Britain and Spain in America 1492-1830 (New Haven:Yale University Press,
- (~) Denis Crouzet, Les Guerriers de Dieu (1525-1610), 2 vols. (Seyssel: Champ Vallon, 1990); Olivier Christin, La Paix de religion: l'autonomisation de la raison politique au XVieme siecle (Paris: Seuil, 1997).
- Skinner, The Foundations of Modern Political Thought (Cambridge: Cambridge University Press, 1978), 2 vols を参照 Tuck, *Philosophy and Government* (Cambridge:Cambridge University Press, 1993) を参照。少々離れた背景については Quentir Clarendon Press, 2001) ; Enlightenment Contested (Oxford: Oxford University Press, 2006). 直接的な背景については Richard とくに次を参照。Jonathan I. Israel, Radical Enlightenment: Philosophy and the Making of Modernity, 1650-1750 (Oxford Dunn, *The History of Political Theory* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), 100-120; スピノザとベールについては John Dunn, 'The Claim to Freedom of Conscience: Freedom of Speech, Freedom of Thought, Freedom of Worship?' John
- University of California Press, 2002) Tomaz Mastnak, Crusading Peace: Christendom, the Muslim World and Western Political Order (Berkeley, Calif.
- $\widehat{10}$ Diarmaid McCulloch, Reformation: Europe's House Divided (London: Allen Lane, 2003)
- いうイエス・キリストの言葉に関する哲学的註解」、『寛容論集』(ピエール・ベール著作集第二巻、法政大学出版局)所収〕 *Interpretation*, A.G.Tannenbaum, (New York: Peter Lang, 1987)〔邦訳、ピエール・ベール(野沢協訳)「〈強いて入らしめよ〉と Pierre Bayle, Philosophical Commentary on the Words of Jesus Christ: Compel Them to Come, in A Translation and Critical
- (2) Charles S. Maier, Among Empires: American Asscendancy and its Predecessors (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2006). かなり異なった視座からのものとしては次を参照。Harold James, The Roman Predicament: How the Rules of International Order Created the Politics of Empire (Princeton: Princeton University Press, 2006)
- (2) Albert Hirschman, The Passions and the Interests: Arguments for Capitalism before its Triumph (Princeton: Princeton University Press, 1977)〔アルバート・O・ハーシュマン(佐々木毅・旦祐介訳『情念の政治経済学』法政大学出版局〕。グローバ ルな商業化の実際の想像的意味に関するよりバランスのとれた歴史的見方としては、次を参照。Istvan Hont, Jealousy of Trade (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2005).
- (4) Amartya Sen, The Argumentative Indian (London: Allen Lane, 2005)
- (12) Paul Bracken, Fire in the East (New York: Harper Collins, 1999).

- <u>16</u> David Pilling, 'Japan Talks of China as an Equal Power,' Financial Times, 7/3/06, p. 8.
- 17 Press, 2005) across the Pacific: essays on the clash between Chinese and Western political theories today (Hong Kong: The Chinese University の諸要件に関する、部分的に競合する文明についての二つの主要な解釈については、次を参照。Thomas A. Metzger, A Cloud Cf. John Dunn, Interpreting Political Responsibility (Cambridge: Polity, 1990) and The Cunning of Unreason (2000). 思慮

## 訳者付記

訳はこの修正版にもとづいている。 of the New World Disorder,' 2006 である。ただし、二〇〇六年九月に若干の修正を加えた原稿が訳者に送られてきたので、ここでの翻 により開催された。ここに訳出されたのは、その際に発表されたペーパー、 John Dunn, 'Civilizational Conflict and the Political Sources 州大学リサーチコア「二一世紀地球市民育成のための政治哲学的基盤形成リサーチコア」(代表・関口正司)と九州大学政治研究会の共催 二○○六年七月一一日、九州大学法学部大会議室において、国際シンポジウム「グローバル化と多文化状況における政治理論

できた。氏の御厚意に感謝したい。 九年十二月の来日の際にも九州大学法学部で講演しているが、今回はダン氏の許可をいただき、『政治研究』にその邦訳を掲載することが 著者のジョン・ダン氏は、ケンブリッジ大学キングズカレッジのフェロー、および同大の政治理論講座教授である。ダン氏は、一九九 訳出に際し、原文において強調のためにイタリック体になっている部分には傍点を付した。また、訳者による補注を〔〕内に示した。

どがある。 の未来」(関口正司訳『思想』一九八四年一一月号、岩波書店)、『デモクラシーの未来』(加藤節編訳、東京大学出版会、 の著作を発表している。邦訳されたものとしては、『政治思想の未来』(半澤孝麿訳、みすず書房、一九八三年)、「西欧における政治哲学 ダン氏は、一九四〇年生まれ、ケンブリッジ大学出身で、ジョン・ロック研究から出発し、現代の政治哲学・政治理論について数多く 一九九三年) な